

朝鮮語の語頭子音群とアルタイ語の長母音

著者	大林 直樹
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	30
ページ	1-14
発行年	1996-09-25
その他のタイトル	Korean initial consonant-groups and Altaic long vowels
URL	http://hdl.handle.net/2241/13633

朝鮮語の語頭子音群とアルタイ語の長母音

大 林 直 樹

1. はじめに

本稿は中期朝鮮語に見られる語頭子音群について、それがアルタイ語的起源を有するのではないかという考えから比較考察を進めた結果を述べようというものである。朝鮮語が中期朝鮮語といわれる時期の文献には、現代語諸方言においては見られなくなった sg, sd, sb, bd, bs, bj, bt, bsg, bsd といった語頭子音群を持つ単語が多く見られることはよく知られている。しかし、これらの語頭子音群は、より古い段階において、CVC のような音結合から V が脱落することによって発生したものであって、決して起源的に CC であったとは思われないことは多くの研究者の一致した見解である。ところで問題は、その母音が何故脱落したかである。中期朝鮮語の語頭子音群発生の原因が何であったかについてこれまでのところ定説はないが、金芳漢（1983：173）は、「……その形成（語頭子音群の形成……引用者）の原因としてわれわれはまずアクセントとの関係、すなわち、第一音節にアクセントがなく第二音節にアクセントがあったであろうということを仮定してみる」と述べている。

結論的なことを先に述べることになるが、本稿の筆者による調査の現段階では、朝鮮語の語頭子音群の成立の過程を考えるにあたっては、アルタイ語の第二音節における長母音の問題が深くかかわってくるのではないかと考えられる。つまり、上に引用した金芳漢の「第二音節にアクセントがあったであろう」という見解に対して、本稿の筆者は、「第二音節の母音が長母音であったのではなかろうか」と仮定してみることによって、この朝鮮語の一時期における語頭子音群の発生をめぐる諸問題に対する何らかの解決の糸口を見いだすことができるのではないかと考える次第である。

アルタイ語の起源的な長母音とその朝鮮語との関係については、すでに村山七郎（1983）において一つの見解が示されている。村山の研究は主として原始

アルタイ語の母音の長短が日本語にいかん反映しているかを取り扱ったものであるが、その中には朝鮮語からの語彙対応例が9つ含まれており、それによれば、原始アルタイ語の長母音が朝鮮語では高アクセント（中期朝鮮語文献における傍点1つ、去声）に、原始アルタイ語の短母音が朝鮮語では低アクセント（中期朝鮮語文献における傍点ゼロ、平声）にそれぞれ対応するというのである。村山（1983）の挙げた例をいくつか引用してみると、例えばエベンキ語 *muu*「水」、モンゴル文語 *mören*「川」に対する中期朝鮮語 *mīr*（去声）「水」の対応では、アルタイ語の長母音に対して朝鮮語では高アクセント（去声）が対応しており、またエベンキ語 *äv* - *~ävü* - *~äva*「背負って運ぶ」、ウデヘ語 *ävu*「運ぶ」に対する中期朝鮮語 *äb*（平声）「背負う」の対応では、アルタイ語の短母音に対して朝鮮語では低アクセントが対応している。さらにまた、村山七郎（1984）では、朝鮮語と日本語のアクセントの対応の問題に光が当てられ、そこでは、第一音節においては、日本語の高アクセントには朝鮮語においても高アクセント（去声）が、また、日本語の低アクセントには朝鮮語でも低アクセント（平声）が対応するものとされ、例えば中期朝鮮語 *ib*（去声）「口」と日本語 **ipu*（*i* は高アクセント）「言う」の対応や、中期朝鮮語 *goma*（*go* は平声）「熊」と日本語 *kuma*（*ku* は低声調）「熊」の対応などが例挙され、語形のみならずアクセントにおいてまで一致するとしている。本稿はこうした村山の研究から多くの示唆を受けたものである。

本稿で特に問題とするのは、アルタイ諸語、その中でもとりわけモンゴル語の第二音節以下の長母音であって、この長母音の影響によって第一音節の母音が弱化、脱落し、そのことによって朝鮮語の歴史のある時期において語頭子音群 *sg*, *sd*, *sb*, *bd*, *bs* 等々が生ずるに至ったのではないかということである。つまり、第二音節の母音が長く、そしておそらくは強く発音されたために、第一音節の短い母音は一層短くなり（弱化し）、やがては消失するに至ったのではないか、それが中期朝鮮語の諸文献では語頭子音群として表記されているのではないかと考えるのである。

以下に本稿の筆者が集めた新たな比較語彙を示すが、朝鮮語の例は、偶然とは思われるが、多くが *sg* という語頭子音群を示す例である。*sg* 以外のものは合わせて7例にすぎない。特に、おしまいの3例は祖語における母音はじまりの語の例であるが、アルタイ語（モンゴル語）の長母音と朝鮮語におけるその対応という問題を考究する上で必要不可欠の例であると思われるのであえて考察の対象とした。

2. 比較考察

- (1) 中期朝鮮語 sgAr- (声調は去声)「敷く」又は、中期朝鮮語 sgur- (声調は去声)「ひざまづく」：モンゴル文語 sayu-「座る，泊まる」，sayudal「場所，席」：満州語 soorin「帝王位」

この比較は朝鮮語の側で2つの比較可能な動詞語幹が存在するが、そのどちらを取るにせよ、語幹末に子音 r をもつという点で、モンゴル語 sayu- との比較は慎重に進めなければならない。仮に、この語幹末の子音 r が語根に属しないと仮定すると、この sgAr-「敷く」にせよ、また sgur-「ひざまづく」にせよ、両方とも母音の声調が去声を示している点が注目される。なぜなら、この去声は祖語の長い母音に由来するものであり、その第二音節母音の長さゆえに第一音節母音が脱落して、語頭に子音群 sg が発生したと考えられるからである。モンゴル語においては、以下に考察する他の例と同様に、長い母音の直前の子音 γ が現代モンゴル諸語においては消失している。例えば、ハルハ・モンゴル語 suu-「座る，とまる，住む，結婚する」，ブリヤート語 huu-「座る，住む」のように。

なお、中期朝鮮語 saori「登牀」がモンゴル語からの借用語であることは、ラムステット (Ramstedt 1949: 224) によって指摘されている。また、李男徳 (1985²: 104) では、中期朝鮮語 sgur-「ひざまづく」と日本語 Fizamaduku「ひざまづく」の比較が試みられているが、容易には理解し難いものである。

- (2) 中期朝鮮語 sgAy- (去声)「覚める，悟る」：モンゴル文語 čegeži「上半身，胸部；記憶，意識」，čegežile「記憶する，覚える，暗記する」，ハルハ・モンゴル語 tseež「胸；記憶，意識」，ブリヤート語 seeže「胸」，seeželde「記憶する」：満州文語 cejen「胸」¹¹

ラムステット (Ramstedt 1982: 66) は、この朝鮮語の動詞を *skai- 又は *pkai- に由来すると考え、? を付しながらもモンゴル語 segee「光，明るさ」，segeere「明るくなる」等との比較を試みようとしている。このラムステットの試みで注目すべき点は、この場合ラムステットも、本稿の筆者同様に古い朝鮮語の段階においての第一音節母音の脱落による語頭子音群の発生を考えていたということである。もっとも、本稿の筆者には、ラムステットの比較よりも上掲の

「胸」を意味するモンゴル語諸形式との比較のほうが意味の面でより妥当ではないかと思われる。「胸」と「覚める、悟る」では比較に無理があるといわれるかも知れないが、上記のとおりモンゴル語 *čegeži* には「胸」のほかに、「記憶、意識」といった意味も存在しており、また派生動詞 *čegežile* には「記憶する、覚える」という意味もある。朝鮮語 *sgAy-* との比較には意味の点での無理はないように思われる。語形の面では、モンゴル語では第二音節の母音が長かったためにその直前の *g* が消失して、現代語ではハルハ語やブリヤート語のような諸形式が表れている。他方、朝鮮語においては、やはりその古い第二音節における長母音の影響によって、第一音節が弱く発音され、そのため結局はその第一音節母音は脱落し、中期朝鮮語の段階では *sg* という語頭子音群をもつに至っている。ここまでの説明には難点はないと思われるが、問題は中期朝鮮語 *sgAy-* の語幹末に見られる半母音 *y* である。これが *čegeži* の *ži* の反映であるとしたらこの比較はほぼ完全なものとなるが、現段階ではそこまで断定できない。なお、朝鮮語 *sgAy-* の声調は去声を示しており、これはアルタイ長母音と朝鮮語高声調との対応の法則に合致している。中期朝鮮語の文例を示そう。

nogsi doro sgAyrǵ ʒögǵy sgumirosoy sgAydashaya…………

(魂が元どおり覚める時、夢から覚めるようで…………) 〈釈譜詳節 9 : 31〉

- (3) 中期朝鮮語 *sgAradi-* (*sgA-* は去声) 「ぐったりする、だらける、弱まる」：モンゴル文語 *ʒögelen* 「柔らかい、温和な、ゆったりした、のんびりした」、*ʒögedkere-* 「静まる、和らぐ」、ブリヤート語 *zöölö (n)* 「柔らかい」、ハルハ・モンゴル語 *zöölön* 「柔らかい、柔軟な、のんびりした」：エベンキ語 *ʒulbə, ʒulbəkin* 「柔毛で覆われた」、ラムート語アルマン方言 *ʒulbur* 「柔らかい、滑らかな」

この中期朝鮮語動詞 *sgAradi-* 「ぐったりする、だらける、弱まる」は、先に (1) で考察した *sgAr-* 「敷く」との語源的関係が考えられなくもないが、一応ここでは別の考えに立って上掲のモンゴル、ツングース語諸形式との対応を考えてみたいと思う。この対応においても、これまでに見てきたいくつかの例と同様のことが言えると思われる。すなわち、中期朝鮮語 *sgAradi-* の *sgA-* の声調は高アクセントである去声を示しており、この去声はモンゴル文語 *ʒögelen* の第二音節の長母音に対応しているということ、この長母音が存在す

るために現代モンゴル諸語においては、直前の子音 *g* が弱まって消滅してしまっているということ、他方朝鮮語においては、その長母音のために第一音節母音が弱化、消失することによって語頭子音群 *sg* を発生せしめていること、などである。中期朝鮮語の文例を示しておこう。

gaʌʌrs bʌrʌmi sɡʌradyɔ bunʌni…………

(秋風が弱まり吹き…………) 〈杜詩諺解初刊23:29〉

(4) 中期朝鮮語 *sgay*, *bsgay* (声調はいずれも去声)「胡麻」: モンゴル文語 *mayʌʒin*「胡麻」

この比較はまず、中期朝鮮語において *sgay*, *bsgay* の両形が存在することが問題となるが、これは筆者としては当時の言語に文字どおり両形が存在したものとそのまま受け取りたい。ただ、*bsgay* のほうは *bsg-* という三重子音を語頭にもっており、これがそのまま語源の意味をもつかどうかについては速断しがたいものがある。モンゴル文語形を根拠にして、中期朝鮮語に至るまでのこの語の変化過程を考えて見ると、**mayʌʒ* (in) > **mgay* > **bgay* のような変化が想定されるが、実際には中期朝鮮語に *bgay* の形は見られない。そこで想起されるのが有名な、中期朝鮮語 *sdʌr*「娘」と『鶏林類事』の「寶妲」(*p(i)tar*)、およびそれと比較されるナーナイ語 *patalan*、オロツコ語 *patalaa* (*n-*)、オロチ語 *xatala* (意味はいずれも「娘、乙女」) などである。すなわち、この「娘、乙女」を意味する語の比較においては、中期朝鮮語は語源的な語頭の *p* に対して *s* を示しているのである。だが、中期朝鮮語からさかのぼること約三百年の『鶏林類事』には、「寶妲」とあり、明らかに語頭音は *p* あるいは *b* であったと見られる。このように、中期朝鮮語の *s* 系子音群を頭音に持つ語の中には、*s* 以外の音にさかのぼるものもあったと考えるほうが妥当なようである。ここに示した「胡麻」を意味する中期朝鮮語単語もこのような例の一つと見られはしないか。モンゴル語の頭音が *m* を示しているが、それが朝鮮語で *b* に変化することについては、第一音節母音が脱落した後に、後続の閉鎖音 *g* に同化されて *m* > *b* のような変化を引き起こしたのと考えられる。そしてその後で、「寶妲」> *sdʌr* と同様の変化が起こって中期朝鮮語の段階では *sgay* と表記されるに至ったのではなかろうか。ただ、このように考えても、共存するもう一つの語形 *bsgay* については合理的な説明がなされない。今後の考究に俟ちた

いとおもう。

- (5) 中期朝鮮語 *sgori-* (*sgo-*は上声)「ためらう, 憚る, 忌む」: モンゴル文語 *tögeri-*「迷う, 困惑する」, *tögeril*「迷うこと」, ハルハ・モンゴル語 *töör-*「迷う」, プリヤート語 *tööri-*「道に迷う, 彷徨する」

この比較は声調に関して問題がある。というのも, 朝鮮語 *sgori-*の第一音節の声調が去声ではなく上声を示しているからである。中期朝鮮語の声調とアルタイ諸語の母音の長さの対応の研究で, アルタイの短母音は朝鮮語の平声(低声調)に, また, アルタイの長母音は朝鮮語の去声(高声調)に対応することが基本原則であることが明らかにされているが, 中期朝鮮語のもう一つの声調である上声(上昇調)については, アルタイ語とどう対応するかについてまだ詳しい研究が行われていないのが現状である。したがって, 本稿では単に比較の可能性としてここに上記の対応の可能性を提起するにとどめたいと思うが, モンゴル語で第二音節の長母音があるためにその直前の子音 *g* が消失している点や, 中期朝鮮語において語頭に子音群が形成されている点から考えても, 中期朝鮮語のこの単語の第一音節がもつ上声という声調が, やはり何らかの長さに関係していると考えことはあながち根拠がないとは言えないであろう。なお, ラムステット (Ramstedt 1982: 77) はこの中期朝鮮語動詞をチュルク語 *káz-*「通る, 通過する」, モンゴル文語 *keri-*, *kerü-*「彷徨する, うろつき回る」等との比較を試みているが, 意味の点で本稿の筆者には容易に納得しがたいものがあるが, いかがなものであろうか。

- (6) 中期朝鮮語 *sgori* (*sgo-*は平声)「尾」: モンゴル文語 *segül*「尾, 端, 最後」, *segülde-*「最後になる, とり残される」, ハルハ・モンゴル語 *süül*「尾, 端, 最後」, プリヤート語 *hüül*「尾, 脂肪の多い羊尾」: エベンキ語 *sol*, *sul*, *suul*「尾」

ラムステット (Ramstedt 1982: 91) はこの中期朝鮮語 *sgori*「尾」を?を付けてモンゴル語 *bagur*「臀部, しり」と比較している。筆者はこのラムステットの比較に反対するものではないが, ここに新たな対応の可能性のあるものとして上記のモンゴル諸語諸形やエベンキ語諸形との比較を提起したいと考える。この比較は意味的には何の問題もないと思われるが, 語形の面では大きな

問題がある。朝鮮語 *sgori* の語末の母音 *i* がどこから来たのかという問題が一つ。そして、第一音節の *sgo-* の声調が去声を示さず、平声であるという点の一つ。特にこの声調の問題は重大で、アルタイ語の長母音には中期朝鮮語の去声（高声調）が対応するという原則から外れているということは、この比較を断念させるほどのたいへんな事実ではある。しかし、現代モンゴル諸語において第二音節長母音の影響によって語中の *g* が消失していること、そして中期朝鮮語においては第一音節の母音脱落によって語頭子音群が形成されていることは、他の多くの例と並行する現象なので簡単に放棄のできない比較でもある。声調の不一致の問題は今後の研究を待ちたいと思う。なお、エベンキ語の諸形は『ツングース・満州比較辞典』では、モンゴル語からの借用語として扱われていることを付記しておきたい。

- (7) 中期朝鮮語 *sgoy* (声調は去声)「謀, 計略」, *sgoy-halda*「計画する, 企む」: モンゴル文語 *niyu-*「隠す, しまい込む」, *niyuca*「秘密」, *niyusad*「陰謀者」

この比較で問題となるのは、モンゴル語が頭音として *n* を示している点である。朝鮮語において、祖語の第二音節長母音の影響による第一音節母音の弱化、脱落の結果としての語頭子音群 *ng* がはたして *sg* へと発展したのかどうか、他の同様な例が発見されない限り、この比較は説得力のあるものとはなり得ないと思われるので単に比較の可能性のある例として問題提起するにとどめたい。

- (8) 中期朝鮮語 *sgu-* (声調は去声)「夢を見る」, *sgu-m*「夢」: モンゴル文語 *ʒegüle*「夢を見る」, *ʒegüdün*「夢」, ハルハ・モンゴル語 *züüdl*「夢を見る」, *züüd (en)*「夢, 夢見」

ラムステット (Ramstedt 1949: 129-130) は cf. として *tung. hukule-*「寝る」を朝鮮語 *kkum* の項目で比較して、この現代朝鮮語の語頭に見られる硬音については、*kku-* (**uku-* (?) or **xku-* のような発展を考えているようであるが、このツングース語と同根の語をいま『ツングース・満州比較辞典』で見ると、エベンキ語 *hukləə-*「寝る, 横になる」, ソロン語 *ugl'a-*「横になる」, ラムート語 *hukləə-*「寝る, 横になる」, ネギダル語 *xuylə-*「寝る,

横になる」, ナーナイ語クル・ウルミ方言 *fukulgi* 「寝転ぶ」等であり, これらの語頭音はツングース語的に *p にさかのぼると思われる例であり, 朝鮮語の s 系の語頭子音群のあるものには *p にさかのぼるものがあることは否定できないことは既に (4) の「胡麻」を意味する語の比較のところで言及した次第ではあるが, 何よりも意味の点でこのラムステットが示唆しているツングース語の諸形は「夢」とは関係しないようにおもわれるのである²⁾。本稿の筆者はここに新たな比較の可能性として, 上掲のモンゴル語諸形と中期朝鮮語との対応を考えて見たい。モンゴル文語諸形の第二音節母音は長母音であった。それがために現代モンゴル語ではその直前の子音 g が消失しているのである。朝鮮語では g は消えることはなく, その代わりに第一音節母音が脱落している。そのため, 朝鮮語とモンゴル語との間に見かけの上では大きな違いが生じ, 現代語を見ただけではとても比較の対象にならないような語形になってしまっている。いや, 現代語のみならず中期朝鮮語とモンゴル文語の語形を比べても, 一見比較は無理なように思われる。しかし, 祖語において第二音節母音が長母音であったこと, そしてその後モンゴル語では g が消失したこと, 朝鮮語では第一音節の母音が脱落したことを考えることによってはじめてこの比較は可能になってくる。モンゴル語のほうが古形を保っている。**ʒegüü-* > **ʒe'üü-* > *züü-* (モンゴル語), **ʒegüü-* > **ʒgüü-* > *sgu-* > *ggu-* (朝鮮語) のような変化をそれぞれ想定できよう。中期朝鮮語の文例を挙げておく。

nay ɔʒɔsgiy dasʌs gaʒis sgumir sguuni…………

(私は昨日五種類の夢を見たが…………) 〈月印釈譜 1:17〉

- (9) 中期朝鮮語 *bʒʌ-* (声調は去声)「圧する, 搾る」: モンゴル文語 *baʒu-* 「握りしめる, 搾る」, ハルハ・モンゴル語 *baz-* 「握りしめる, しわくちゃにする, もみくちゃにする, 搾る」, プリヤート語 *baʒuu-* 「圧搾する, しわくちゃにする」

この比較はこれまでに見てきた (1) から (8) までの例とは異なり, 中期朝鮮語で語頭に b をもっている点が注目される。中期朝鮮語の語頭子音群は s に始まるものと, b に始まるものとに大別されるが, この b に始まる子音群については従来もいくつか他のアルタイ諸語との比較がなされてきたことについては既に述べた。この比較は, それらにさらに一つ新しい対応例を追加するこ

とになるであろう。まだ比較例が少なくて確かなことは言えないが、この *b* に始まる子音群についても、その発生の原因に関しては *s* に始まる子音群についてこれまでの (1) から (8) までの比較において述べてきたことと同様のことが言えるのではないと思われる。なぜなら、モンゴル語の第二音節母音はたして長母音であったかどうかは断言できないが、しかし、朝鮮語 *bʒa-* の声調が去声 (高い声調) であり、それはアルタイ諸語の長母音に対応するものであるという点から、モンゴル語の方も *baʒu-* の *u* が長母音であった可能性が高いと言えるし、また、そのように考えることによって朝鮮語の語頭子音群の発生もより合理的に説明されるのではないかと考えられるからである。ただ、モンゴル語の長母音、とりわけ第二音節以下のそれについては、*ɣ/g* に後続する場合以外は、研究のより一層の精密化が要請されている現状であり、安易な憶測は差し控えなければならないが、しかし、このような対応例を今後より多く積み重ねていくことは、モンゴル祖語の長母音設定という問題にも少なからず寄与するのではないと思われる。もっとも、本稿で新たに示すことのできる朝鮮語の *b* に始まる子音群の比較対応例はこの例を含めて四つである。中期朝鮮語の文例を示そう。

naŋ zyaŋha sburhuywa nibgwarar sdiho ʒib bʒa sɔno doyman mɔɡɡo...

(生のミョウガの根と葉とを搗いて汁を搾って三、四升だけ飲み…) 〈分門瘟疫易解方25〉

- (10) 中期朝鮮語 *bʒa-* (声調は去声) 「(髪を) 結う」: モンゴル文語 *büci* ~ *büce* 「撚り紐, リボン」, *büčile-* 「*büci* で結ぶ, 縛る」

ラムステット (Ramstedt 1982: 207) は中期朝鮮語の名詞 *sdiy* 「帯」を **bdiy* に由来するものと見て、ここに挙げたモンゴル文語名詞 *büci* ~ *büce* との比較を試みている。先にも触れたように、中期朝鮮語の *s* 系語頭子音群の中には、その語頭音 *s* がさらに古くは *b* やその他の子音にさかのぼるものがあるとする説は一定の根拠があると思われる。したがって筆者もこのラムステットの比較を退けようとは思わないが、別の可能性として、この中期朝鮮語 *bʒa-* 「(髪を) 結う」を挙げておきたい。この場合は、祖語の頭子音 *b* がそのまま中期朝鮮語形に反映していることになる。モンゴル語 *büci* ~ *büce* の第二音節母音が長母音であったとする証拠はないが、朝鮮語におけるの第一音節母音の脱落と語頭

子音群の発生という結果に照らして、それが長母音であった可能性はあると思われる。中期朝鮮語 $b\dot{3}\Lambda-$ の声調が何よりそれを物語っている。

- (11) 中期朝鮮語 $b\dot{d}i-$ (声調は去声)「蒸す, ふかす; 蒸し暑い」: モンゴル文語 $b\ddot{u}ri-$ 「発酵させる, 蒸す」³⁾

モンゴル語 $b\ddot{u}ri-$ の第二音節母音 i が長母音であったという証拠はない。しかし, もしこの比較が真実ならば, 朝鮮語の語頭子音群の発生の根拠が祖語における第二音節の長母音にあるのであるから, モンゴル語 $b\ddot{u}ri-$ の i も長母音であったことになる。またこの比較では, 第一音節母音が脱落して朝鮮語では $bri-$ となるはずなのに, $b\dot{d}i-$ として現れている。これは, 閉鎖子音 b によって後続の r が同化され同じ閉鎖子音 d になったと説明し得るが, 同様の例証の追加が望まれる。中期朝鮮語の文例を挙げよう。

moys ʒibiy b̄din bami d̄obgo…………

(山家の蒸し栗は暖かく…………) 〈杜詩諺解初刊 7: 18〉

- (12) 中期朝鮮語 $b\dot{s}\Lambda-$ (声調は去声)「包む, 取り囲む」: モンゴル文語 $b\ddot{u}se$ 「帯, ベルト」, $b\ddot{u}sele-$ 「包囲する, 帯をする」: エベンキ語 $b\ddot{u}sə$ 「帯, 革帯」, $b\ddot{u}sələə-$ 「帯をする」, ソロン語 $b\ddot{u}sələə-$ 「囲む, 包囲する」

モンゴル語とツングース語の諸形式が同一起源であることは間違いないであろう。問題は朝鮮語 $b\dot{s}\Lambda-$ であるが, 意味・語形両面から十分に対応の可能性があると思われる。モンゴル語やツングース語の第二音節母音ははたして古く長母音であったかどうかはなお断定できないが, 中期朝鮮語の $b\dot{s}\Lambda-$ の声調が去声であることがそれを暗示していると考えられる。

- (13) 中期朝鮮語 $g\ddot{u}rum$ ($gu-$ の声調は去声, $-rum$ の声調は平声)「雲」: モンゴル文語 $eg\ddot{u}len$ 「雲」, ハルハ・モンゴル語 $\ddot{u}l$ 「雲」, プリヤート語 $\ddot{u}l\ddot{e}$ 「雲」

この比較は, この後に続く二つの比較ともども, 朝鮮語の語頭子音群とは直接関係しない。何故なら, 中期朝鮮語の頭子音は g であって子音群を示してい

ないからである。また、モンゴル語のほうでも語頭が母音で始まっていて、一見して、この比較は本稿で扱うのは不適当と思われるかも知れない。しかし、これまでに比較してきた諸例における、祖語から中期朝鮮語への、また、祖語から現代モンゴル語諸方言への変化の過程を思い起こしていただきたい。すなわち、この比較は祖語において第二音節母音が長母音でありなおかつ第一音節が母音に始まっている場合の比較を代表する例なのである。祖語において、第一音節が子音に始まる音節であり、第二音節の母音が長母音である場合には、これまでに見てきた諸例のように中期朝鮮語においては語頭子音群が形成された。しかし、この例のように第一音節が母音に始まる場合は、モンゴル語については先に検討した(1)～(8)の比較例と同様のことが言えるが、朝鮮語については、第一音節が何の痕跡も残さずに消えてしまい、第二音節の子音が頭音となる形態が出現するに至るのである。したがってこの比較もまた、朝鮮語における第二音節母音の長さのための、第一音節母音の弱化、脱落という現象を明示していると言うことができよう。声調についても、gurum の gu は去声(高声調)を示しており、モンゴル文語 egülen の第二音節に推定される母音の長さとの一致を示している。中期朝鮮語の文例を示そう。

moysgor buyn dāynan gurums giuni yorbo…………

(山谷の虚ろな所には雲の気運が薄く…………) (杜詩諺解初刊 7:14)

- (14) 現代朝鮮語 gor 「怒り」, gor nayda 「怒る、腹を立てる」, gor nada 「怒る、腹が立つ」: モンゴル文語 ayur 「怒り」, ハルハ・モンゴル語 uur 「怒り」, uur xürex 「怒る、腹が立つ」

この比較も、直前の比較の場合と同様に、祖語における形態は語頭が母音で始まっている。したがってこの場合も、第二音節母音の長さゆえの第一音節母音の脱落の結果として、朝鮮語では第二音節子音 g が語頭に立つという結果をもたらしている。しかし、この gor は中期朝鮮語には見られない単語であり、それゆえに声調も不明である点から、先に挙げた比較ほどの信頼性は得られないのが残念な点である。ラムステット (Ramstedt 1949:121) は、この朝鮮語 gor をモンゴル文語 qor, qoron 「毒、怒り、痛み」, qorus- 「恨む、苦しめる、傷つける」, qoruda- 「悪意を抱く」などと比較している。このラムステットの挙げる「毒」を意味するモンゴル文語単語は正確には qoura であったよ

うである(小沢 1983: 476)。これはまた、ラムステットも一部挙げているが、エベンキ koro, korok「毒」、ソロン xorō「毒」、オルチャ korxoda-「怒らせる」、ナーナイ korxi「うっかり」、kooro「侮辱」、満州文語 koro「恨み、怨恨」のようにツングース諸語にもモンゴル語と同根語と見られる諸形式が広く見受けられる。本稿の筆者としてもこのラムステットの比較を一概に否定しようとは思わない。当面は、上掲のモンゴル文語 ayur「怒り」との両方の比較の可能性を残しておくのが妥当かと思われる。意味の面からもそう言えるであろう。

- (15) 中期朝鮮語 gorΛ- (声調は第一, 第二音節とも平声)「平均している, 平らだ, 穏やかだ」: モンゴル文語 ögele-「平らにする, 均一に切り縮める」, ハルハ・モンゴル語 ööl-「同」

この比較も、直前の二つの例と同じくモンゴル語は母音始まりの語であり、したがって、第二音節の長母音が強く発音されることによって朝鮮語では第一音節が丸々脱落しているのだと考えたくなる。しかし、朝鮮語 gorΛ-の go の声調が平声であるため規則的な対応を示す例とは言えない。このような点から、ここでは単に比較の可能性として提示するにとどめ、声調の問題についての後考をまちたいと思う。

3. おわりに

以上見てきたところにより、中期朝鮮語文献に見られる語頭子音群をもつ語がいかなる起源を有するかという問題に多少なりとも光が当てられたのではないと思われる。要約すると、中期朝鮮語の語頭子音群は起源的なものではなく、本来は子音間にあった母音が、その直後の母音が長く強く発音されたために、その影響によって弱化、脱落したと考えられるのではなからうか。そしてその結果としての語頭子音群の発生なのであろう、ということである。

もっとも、これで問題が解決されたとは思われない。例えば、(5)(6)(15)の比較に見られる声調の例外の問題がある。村山七郎(1983, 1984)の研究成果に立脚して比較考察を進める以上、声調が対応しないということは、子音や母音が一致しない(語形の不一致)ことに劣らぬ深刻な問題である。

さらに、もう一つの問題は、本稿において扱われた中期朝鮮語の語頭子音群は大部分が sg-を示しているということである。それ以外の例は、(9)(10)

の bʒ-, (11) の bd-, (12) の bs- の 4 例にすぎない。このような偏りは、モンゴル語の長母音が第二音節以下では、少数の例外的な場合を除いて、-γ/g- の後の位置においてのみ集中的に明らかにされていることによると言えると思われるのだが⁴⁾、朝鮮語の側からもこの偏りを正す何らかの試みがなされるべきであると考え。本稿の (9) ~ (12) の比較は正にそうした試みなのだが、これにとどまらずさらに多くの比較語彙を求める努力が成されなければならない。モンゴル語の長母音が朝鮮語の語頭子音群の発生過程をある程度明らかにしたように、こうした研究を継続することによって、朝鮮語の語頭子音群がモンゴル語の長母音の問題に関する研究の進展に何らかの寄与ができると思われるからである。

また、中期朝鮮語の語頭子音群がはたして起源的な結合（特にその前項が）をそのまま示しているのかどうかという問題もある。本稿では比較例 (4) のところでこの問題に若干言及したが、まだまだ今後の研究にまつところが多いようである。

注

- 1) 金思燁 (1974: 442-443) は朝鮮語 sgay-「覚める」を日本語 *sameru*「覚める」と比較し、さらに同一語根を含む朝鮮語 sgay-dad-「悟る」を日本語 *satoru*「悟る」と比較しているが、筆者には容易には理解し難いものである。李男徳 (19851: 320) にも同様の比較が見られる。
- 2) もっとも、ロシア語 *son* などは「眠り」と「夢」の両方を意味するが。
- 3) 小沢重男 (1978: 304) では、このモンゴル語動詞 *būri*「蒸す」と日本語 *mur-eru*「蒸れる」の語根と推定される **mur-*との比較が試みられている。
- 4) 野村正良 (1979) では、モンゴル語の長母音の問題が広範に取り扱われており、そこでは第二音節以下における -γ/g- 以外の子音に後続する長母音の問題も詳細に検討されているが、それでもやはり -γ/g- に後続する例が多数を占めているようである。

参考文献

- 小沢重男 (1978) 『モンゴル語と日本語』弘文堂
 小沢重男 (1983) 『現代モンゴル語辞典』大学書林
 金 思燁 (1974) 『古代朝鮮語と日本語』講談社
 金 芳漢 (1983) 『韓国語 *iy* 系統』ソウル
 野村正良 (1979) 『原蒙古語の母音体系に就いての研究』采華書林

- 村山七郎 (1983) 「原始アルタイ語の母音の長さの日本語における reflex」『京都産業
大学国際言語科学研究所所報』第5巻第1号
- 村山七郎 (1984) 「日韓語比較とアクセント」『月刊韓国文化』1984年4月号
- 李 男徳 (1985¹) 『韓国語語源研究Ⅰ』ソウル
- 李 男徳 (1985²) 『韓国語語源研究Ⅱ』ソウル
- Ramstedt, G. J. (1949) *Studies in Korean Etymology*. Helsinki.
- Ramstedt, G. J. (1982) *Paralipomena of Korean Etymologies*. Helsinki.